

聖書：士師記15章14～20節

説教：渇きを覚える

はじめに

前回までの流れを振り返ってから今日の箇所を見ていきます。サムソンがイスラエルの敵であるペリシテ人の女性と結婚するのですが、些細なことからペリシテ人と仲違いし、そのことで妻を失ってしまいます。それでサムソンが復讐すると、こんどはペリシテ人が軍隊を出してユダの村を包囲し、サムソンを渡すように要求します。サムソンにも落ち度はあったのですが、ペリシテ人にも大きな問題がありました。ところがユダの村の人々は、ペリシテ人を恐れ、サムソンを綱で縛って敵の手に引き渡してしまった。それが前回までの話しです。今日のところでは、サムソンがスーパーマンのように敵を倒して大活躍していく。そんなふうにも見えますが、本当にそれだけなのか。主のみこころがどこにあったのか。ともに考えていきます。

1 戦うサムソン

1) あご骨を手取る

14節。「サムソンがレヒに来たとき、ペリシテ人は大声をあげて彼に近づいた。すると、主の霊が激しく彼の上に下り、彼の腕に掛かっていた綱は火のついた亜麻糸のようになって、その縄目が手から解け落ちた。」主の霊が下ったことで綱が解け、ろばのあご骨を見つけ、それを手に取って千人のペリシテ人を倒した。ろばのあご骨はかなり頑丈なのだそうです。それでもひとつのあご骨で、これだけの人を倒すことができるのはとても思えません。ここにも主の霊が働いていると考えるべきです。

2) あご骨を投げ捨てる

この戦いが終わったときサムソンはこんな歌を歌います。16節。「ろばのあご骨で、山と積み上げた。ろばのあご骨で、千人を打ち殺した。」「ろばのあご骨」のおかげで山と積み上げることができたと言っている。主の力によるものとは言わない。そのことにまず注意しましょう。ところが続く16節の歌を歌い終わると彼は「そのあご骨を投げ捨てて」してしまうのです。これはどういうことか。じゅうぶんに敵を倒したので満足したのでしょうか。

2 祈るサムソン

1) 「喉が渇いて死にそうです」

そうではなさそうです。18節。「そのとき、彼はひどく渇きを覚え、主を呼び求めて言った。

『あなたは、しもべの手で、この大きな救いを与えてくださいました。しかし今、私は喉が渇いて死にそうで、無割礼の者どもの手に落ちようとしています。』」無我夢中で水も飲まずに一心不乱に千人を倒し、最後は陽気に歌を歌うところまではよかった。ところが一息ついて、はっと我に返ったらひどく喉が渇いているのに気がついたということのようなのです。私たちも、ときどき「喉が渇いて死にそうだ」と言うことがあります。でも、ほんとうに死ぬと思っているわけではない。では、サムソンも大げさに言ったのか。いいえ、本当に彼は死にそうだと感じている。

2) 主に呼び求めた

その理由はこうです。彼は、信仰をもった両親のもとで子ども時から、神のみことばを教え込まれ、主に祈ることも教えられてきました。ところが彼は、大人になると律法を平気で破るし、祈ることなどしたこともない。明らかに神を信じていない。そういう人が、ここで初めて主に祈るのである。理由は簡単です。本当に死にそうだったから。それだけ喉の渇きが切実だったということですから。力では誰にも負けない自信はあったのに、水ひとつ手に入れることができない。手に持っていたろばのあご骨では自分を救うことができない。それで、あご骨を投げ捨て、主に祈ったことなどなかったのに、切羽詰まって主に祈った。これこそ、困ったときの神頼みということなのです。

3) たとえどんな動機で祈っても

皆さんは、困ったときの神頼みのような祈りは聞かれるはずがない、と思っていませんか。ところがここに書かれてあるとおり、神はサムソンの祈りを聞かれて水を飲ませます。これはどういうことでしょうか。生まれるまえから特別に選ばれていたサムソンだからこうしてくれた、ということでしょうか。そうではないと思います。

聖書にこう書いてあるというのであれば、たとえ自分勝手な動機で、「困ったときの神頼み」のような祈りでもよい。とにかく主に祈ってよいということです。実際にそんな祈りをしている人を見た

ら、「信仰なんかないのに」と言って批判したくなるでしょう。確かに、信仰があるかどうか、そこが大切です。問題はいつ信仰をいただくのかです。きちんとした信仰をもって祈る。もちろんそれが一番良いわけですが、たとえ信仰がなくても、祈ったことがきっかけとなって信仰をいただく。そういう順番もありうる。まさにサムソンがそうです。ここで彼は初めて主に立ち返ることになりました。

20節。「こうして、サムソンはペリシテ人の時代に二十年間イスラエルをさばいた。」日本のようなムラ社会では、お金、血縁、名声というような力をもった人が地域のボスになることが多い。しかし聖書は違います。ただ力があるのでよいのなら、サムソンはとっくの昔にイスラエルのさばきつかさになっていたでしょう。ところが、彼がさばきつかさになったのはこの時です。なぜでしょう。以前のサムソンはただ力をもてあまし、周囲の迷惑も顧みない人間でした。能力のある人ほど他人の痛みがわからないと言いますが、サムソンがまさにその典型です。しかし、そんな彼もいろいろな失敗と苦労を重ねるうちに、じょじょに人の痛みがわかるようになっていきます。ユダの人々が三千人集まって自分を捕まえに来たとき、ユダの人々がどれほどにペリシテ人から苦しめられ、つらい思いをしているのか、そのことを考えると「どうして自分を敵に引き渡すのか」と強く言えません。それで、力がない者のような姿になって綱に縛られました。

これまでのサムソンと比べたら驚くような変わりようです。主がここまでサムソンを変えたということです。しかしそこで終わらない。まだ変えられる必要がありました。ユダの人々のためにと思っそろばのあご骨で千人倒しました。しかしのどが渴いたとき、人を救うために必要なのは人の力ではない。本当に必要なのは主の助けなのだ気がつき、主に祈り始めた。こうしてサムソンは信仰者に変えられ、イスラエルのさばきつかさとなっていくのです。

3 主の救いの計画

1) 人の力ではなく

数えてみるとサムソンに主の霊が下ったのは今日の箇所を含めると三回です。いずれの場合も、主の霊が下ったことでサムソンが大暴れをし、そのことで問題が大きくなるというパターンの繰り返しでした。どうしてそのようなことを主がされるのかと不思議でしたが、ちゃんと主のご計画があった。主

から力を与えられて、サムソンがいろいろなことすればするほど、空回りしていくのです。そうして最後にサムソンは気がついた。人の力、人の知恵、人の考えによっては人を救うことができない。主だけにしか救いがない。こうしてサムソンは、主により頼むことを学ぶことになりました。

2) 罪ある者に関わり続ける

あのサムソンがやっと主を信じる者となった。それは素晴らしいことですが、疑問が残ります。サムソンがしてきたことは、人と人とが争い傷つけあい、だれかが殺されていく。そんな繰り返しでした。神はそうではなく、もっと穏やかな方法でサムソンに信仰を与えることができなかったのか。そんな疑問です。

これに関連してですが、こんな質問をされることがしばしばあります。「この世界には戦争が絶えず人が殺されていく。子どもが虐待されたり、先週のニュースにもあったように、自然災害で多くの人たちが亡くなるようなことが起きる。神が私たちを愛しているのであれば、戦争や災害を止めるべきである。もしかして神はいないのか。」

こういいたくなる気持ちはよくわかります。しかしその前に考えなければならないのは、私たちが何をしてきたかです。こんなひどい世界になったのは神のせいではない。私たちの罪が争いを起こし、苦しみを大きくさせているのです。サムソンがしてきたことは、私たちがしていることとまったく変わらない。彼はこの世に神などいないと考え、自分の欲望のままに行動し、結局自分にもユダの人々にもわざわいを招いてしまいました。

神は、わざわいに満ちているようなこの世界をご覧になってなにをされないのか。いいえ、その反対です。サムソンの身に起きたことを見てください。あれほどひどい荒くれ者だったサムソンが、主に救いを求めていく者に変えられていく。これは神の働きです。神は罪人だったときのサムソンに関わり続けている。私たちもまったくおなじです。この世界がよくなるようにと祈るとき、他の誰かがそうしてくれるのではない。神は私たちひとり一人を変えていって、この世界に神のみこころが実現するようにと働き続けています。

どこにそんな証拠があるのか。十字架を見てください。神はご自分のひとり子を遣わしました。この方は十字架の上で弱い姿となりながら、ここに救いがあると教えてくださいました。人の力に頼るのではなく、主の十字架に戻りなさい。サムソンのように弱さを告白したとき、主が御力を与

え、救いを与えてくださる。これが主の十字架です。

このような主とともに歩んでまいります。